

浄瑠璃・時代物

「**国性爺合戦**」

◎初演 正徳五(一七一五)年十一月十五日 竹本座

「近松最大のヒット作は異国情緒たっぷり」

あらすじ

舞台は中国の明。思宋烈皇帝の時代で、栄華を誇っていたが、李蹈天の計略で韃靼兵(蒙古軍)に攻撃される。皇帝は殺され、落城した(初段)。

かつて皇帝の怒りを受け、日本の平戸に渡っていた鄭芝龍は、老一官と名乗り、日本人の妻との間に、和藤内という子どもをもうけていた。和藤内は祖国の危機を知り、明国を復活させようと、父母と三人で大陸に渡る。和藤内らは、一官が昔、

この地に残した娘で、今は甘輝という武将の妻になっている。錦祥女を訪ね、甘輝を味方にするため、居城の獅子が城へと向かう。その途中、母と和藤内は、千里が竹に迷い込み、ここで猛虎と戦う。日本から持参した伊勢神宮のお札で、激しく抵抗していた猛虎を従わせ、敵も驚く活躍をする(二段)。



和藤内らは獅子が城に着くが、甘輝はすでに韃靼軍の將軍に任じられていて、「女（妻）にほだされ、和藤内の味方になったと言われては、末代までの恥辱」と断る。しかし、妻錦祥女と母の覚悟の自害により、勇猛な甘輝を味方につけることができ、甘輝は和藤内を、国性爺鄭成功と名乗らせる（三段）。

国性爺と韃靼兵との戦いは五年が過ぎる。やがて南京城で、決戦の時を迎えた。国性爺の活躍で李蹈天を討ち果たし、ついに勝利を得る（四段・五段）。

見どころ 題材は父が明の人、母が日本人という、明代末に活躍した鄭成功の英雄伝です。日本と中国にわたるスケールの大きな物語で、初演から三年越し、十七カ月の長期公演を記録しました。近世末までに、人形浄瑠璃だけでもおよそ三十回繰り返し上演され、その回数は、近松作品のなかでも断然トップです。歌舞伎や小説にもなるなど、「国性爺ブーム」がおこったほどです。二段目「千里が竹」は、「荒事」と呼ばれる勇壮な演技の中に、「おかしみ」の感じられる場面です。何といっても、三段目「獅子が城」の段が見せ場。特に和藤内の母と腹違いの姉の命をかけた動きにより、劇的な転換が行われる場面が圧巻です。からくりも多用され、華のある作品です。なお「国性爺」というのは、国王の姓を賜った人物の敬称です。